

【持続可能な農業】難防除病害の対策研究を始めました！



近年の地球温暖化現象に伴い、7月中旬から8月下旬にかけて、鳥取県は暑さ厳しい環境となっています。その環境の中、とっとり花回廊では約10万本のマリーゴールドを丘一面に栽培し、来園されるお客様を楽しませています。しかし、2024、2025年と2年続けて7月中旬以降、とっとり花回廊のマリーゴールドが急激に萎凋・枯死する症状が多発し問題となりました(図1)。鳥取大学農学部食料生産システム管理学研究室は本症状の原因究明に着手し、本症状が植物病原細菌の一種である *Ralstonia pseudosolanacearum* によって引き起こされるマリーゴールド青枯病であることを明らかにしました。

R. pseudosolanacearum は土壌伝染性病原細菌であり、我が国においてトマト・ナスなど24科46種の植物に被害を引き起こす難防除病害です。本病の有効防除手段は、化学農薬による土壌消毒とされていますが、持続可能な農業を踏まえると化学農薬に頼らない土壌消毒技術の利用が望まれます。また、本病に強く、鑑賞性に優れているマリーゴールド品種を選定する必要があります。そこで、本病に立ち向かうため、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)農業環境研究部門、とっとり花回廊、鳥取大学農学部食料生産システム管理学研究室の3者で病害対策研究を始めました。まず、とっとり花回廊園内の青枯病汚染花壇を用いて、化学農薬を用いない土壌還元消毒法による消毒を実施しています(図2)。また、世界で販売されているマリーゴールド品種(21品種)を栽培して、観賞用特性と青枯病抵抗性を評価し、栽培品種の選定を行っています(図3)。本研究チームは、とっとり花回廊を訪れるお客様が10万本のマリーゴールド(図4)を楽しめるよう、最善を尽くし、研究に勤しんでいきます。



図1. 青枯病を発症したマリーゴールド



図2. とっとり花回廊園内での土壌還元消毒の実施



図3. 世界から収集したマリーゴールド品種の鑑賞用特性評価(学生が調査した品種特性を説明している様子)



図4. とっとり花回廊における青枯病発生前のマリーゴールド栽培圃場